



「福澤育林友の会」ニュース

第37号 発行日2020年1月10日

福澤育林友の会
東京都港区三田2-15-45 慶應義塾 管財部
TEL: 03-5427-1050 FAX: 03-5427-1190
<http://ikurin.jp/>



「恭賀新年 新しい年を迎え、皆様のご清福をお祈りいたします」

福澤育林友の会
会長 渡部 直樹
(慶應義塾常任理事)

森の美しさと私たちの感性

「ちはやぶる 神代もきかず竜田川 からくれなゐに 水くくるとは」という小倉百人一首に収録されている在原業平の歌は、鮮やかな紅葉の美しさを詠んだものとして — 千早振るという落語もありますが — あまりに有名です。森の木々の紅葉を集めて竜田川があざやかな紅色に染まっている様子は、昔から私たちが大切にしている自然に対する美意識をまさに示していると思われます。紅葉が秋の風物詩であるように、桜は春の風物詩です。桜の美しさに関わる歌は、これもまた多くの傑作が残されていることは、言わずもがなです。

紅葉は、日本列島を北から時間と共に南に下りてきます。反対に桜は、南から北へと昇っていきます。古代から私たちは、森が与えてくれる(一瞬の)美しさと同時に、自然が一定ではなく常に留まらず変化することに感動し、これを基礎に独自の世界観を育んできたと思われます。

文学や哲学にも影響を与えている自然の移り変わりは、単なる定常的な循環型エコシステムではありません。そこには常に、新しい進化が行われているのです。地球を襲った気候変動、火山の爆発、隕石の衝突、それらによって土台がひっくり返されます。それに対応できた個々の生物は、淘汰の試練に適応し、新しく作りかえられた異なったレベルのシステムの要素となるのです。

人間が出現してからは、また新しいメカニズムが加わりました。放牧や農地整備のための樹木の伐採が行われ、それと同時に、植林といったものがなされるようになりました。これが、自然＝森林の産業化の始まりで、実際に大きな利益を人間に齎しました。しかし、人間の知恵は限られ有限なものです。自分たちの行動が、どのような大きな結果を生み出すのか — 社会・経済的な意図せざる結果や外部性に対して — を十分には知り得ません。私たちは、山桜と紅葉の美しさをまもるために、慎重にトライ・アンド・エラーで進むことしか出来ないのです。





第20回植林の参加者

この活動も、平成17(2005)年に積雪のため1度の中止をはさみながらも、平成31(2019)年3月9日(土)に第20回の植林活動を開催することができました。幼稚園生だけの参加人数ではありますが、この間にのべ782名の参加がありました。

活動内容としては、主にコナラやクヌギなどの広葉樹の苗を植えることで植林をさせて頂き、最近では、第1回に植えた苗が、シイタケの穂木として使用するまでに生長するなど、多くの樹木が杜に茂っています。

参加対象が4年生からということもありますが、最近では6年生まで3年連続で参加する児童も増えており、植林活動とともに毎年の樹木の生長も楽しみにしているようです。

静岡県修善寺の地は、戦時中に幼稚園生が昭和19(1944)年に疎開



幼齢木保護チューブをつけて

をした場所でもあり、幼稚園にとって意義のある場所です。この地に幼稚園の杜をご提供頂きました、井草實様におかれましては、第1回よりご同行を頂き毎年、植林活動を見守って頂いております。本当にお世話になり、ありがとうございます。また、慶應義塾からも塾長をはじめ、管財部、学校林運営委員、福澤育林友の会、林業三田会など多くの関係の皆様のご協力での度、20周年を迎えることになりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

まもなく第21回の活動が、令和2年3月14日(土)に実施となります。今回は初めて、前日よりラフォーレ修善寺に宿泊をしての開催を予定しており、多くの幼稚園生が参加し、現地での植林活動やワークショップを予定しています。今後も福澤育林友の会の皆様には、変わらぬご支援、ご指導をお願いいたします。



2人一組になって植林

友情資産の森を訪ねて

山下 良一
(1976 年法学部卒)

去る 9 月 14 日、10 年振り位に友情資産の森を訪ねました。本年 4 月中頃、同期の藤堂栄子さんからメールでお誘いを受けて、福澤育林友の会が主催する今回の見学会に参加させて頂きました。改めて、関係の皆々様に御礼申し上げる次第です。

さて、当日は午後 1 時半に那須塩原駅ロータリーに集合、大型バスで早速、那須黒羽にある友情資産の森に向かいました。千葉県に大きな被害を与えた台風 15 号が過ぎ去ったばかりの状況で、天候は雨がパラつくかと思われる曇天でしたが、晴天で暑さが厳しいよりは過ごし易く恵まれていたのではないかと思います。

卒業 25 周年に 1976 年卒（117 三田会）の私達同期が一部植林して 4ha の山林を塾に寄付したのが、この友情資産の森です。塾への寄付金はある程度用途を特定することもできますようですが、私達は森が成長してからの材としての価値に加えて、保水・土壌保持、更には二酸化炭素の固定化という地球環境問題への貢献に注目すると共に、成長していく姿を見ることができるという効果を考えて森林を寄付することとしましたが、発想の原点としては同期の速水亨・紫乃御夫妻の存在が大きかったと思います。今回もご一緒した速水君は最初に植林の話聞いたとき、「森林は長く手を掛け育てて行かなければならないもので、植林して終わりのような簡単なものじゃない」との思いから、結局、植林した木の維持管理費も添えて塾に寄付することになったとのことでした。



[今回] 2019 年 9 月 14 日



[当時] 2002 年 5 月 11 日



[今回] 2019 年 9 月 14 日



[当時] 2002 年 5 月 11 日

那須塩原駅を出発して 1 時間も経たずに到着。貯木場となっている場所でバスを降りて、そこから、関係者以外立ち入り禁止の山道を数百メートル登りますと、少しひらけたところに、同期の鏑木敏嗣君父娘と私父娘と一緒に植えた桜木の傍らに懐かしい「友情資産 25 年の森」との表示板が見えてきました。

更に、山道を登って、塩那森林管理署の方が予め整えてくださった脇道に入っていくと、左手に「(財) 福澤記念育林会 理事長 長島 昭」「(財) 福澤記念育林会 評議員会議長 海瀬 亀太郎」「慶應義塾大学 常任理事 田中 俊郎」と各々記された三本の白杭があり、そこで暫く散策したり、記念写真を撮ったり、すっかり様子が変わった木々の間で自分が植えた木を探したりしました。

その日の懇親会のときに、長島昭名誉教授が、「植林の後、皆が青い空に向かって歌った塾歌が今まで幾度となく聞いた塾歌の中で最高のものの一つです」と話されたことがとても印象にのこりました。

残念ながら、私を含めて何人かは所用で日帰りとなってしまいましたが、とても素敵な爽秋の旅となりました。

2020 年度「森を愛する人々の集い」

今年の「森を愛する人々の集い」は、例年より1か月早い開催となります。
ご家族・ご友人などをお誘い合わせの上、ご参加下さいますようお願い致します。

【皆さまへのご案内は4月上旬を予定しております】

講演と上演：「アフリカでの野生動物や森林保護と日本の生活」

遠く離れたアフリカの野生生物や森林が日本での人々の選択によって影響を受けている事をお話し頂きます。

『地球が壊れる前に』レオナルド・ディカプリオ主演

映画『ザ・コープ』でアカデミー賞®長編ドキュメンタリー賞を受賞したフィッシャー・スティーブンス監督のドキュメンタリーも上演して頂きます。

日 時：2020年5月9日(土) 15:00～ 講演 (17:20～ 懇親会)
場 所：三田キャンパス 東館 6 階 G-Lab (懇親会:ファカルティクラブ)
講 師：西原 智 昭 (ニシハラ トモアキ) 氏

【プロフィール】

星槎大学共生科学部特任教授

国際保全 NGO である WCS (Wildlife Conservation Society; 本部はニューヨークにある) の
自然環境保全研究員

NPO 法人アフリカ日本協議会・理事。京都大学理学部人類進化論研究室出身、理学博士
『先住民と森林の問題や絶滅しようとしているマルミゾウの保護にコンゴ共和国で
30 年間暮らしながら従事して来た』

お知らせ

＜慶應義塾管財部より＞

福澤育林友の会会則において、目的の一つとして定められた「**慶應義塾の学校林の保育に関する支援を行う。**」に基づき、2018 年度末での残余金の一部を慶應義塾に対して寄付していただきました。皆様の温かいご支援に心より感謝申し上げます。

以下、寄付金の活用事例の一部をお知らせいたします。

福澤育林友の会より慶應義塾へご支援いただきました寄付金につきまして、昨年の第 35 号ニュース(2019 年 1 月 10 日発行)で、使途の一例として、友情資産 25 年の森(2001 年設置)の看板更新について紹介させていただきました。このようにモノとして目に見える形で残るものだけではなく、学校林における生徒児童の課外活動にも補助費という形で寄付金を活用させていただいております。

具体的には、本号ニュースにおいて、幼稚舎千葉教諭よりご寄稿いただきました修善寺幼稚舎の杜の活動や、年 2 回三重県山林で実施しております志木高等学校による志木の森での活動等が挙げられます。これらの活動の中で植林実施に必要となります苗木代や現地でのサポート費用等に寄付金が充当されています。

自然に接する機会が失われつつある都会の生徒児童にとっては、広大な自然に触れる活動が貴重な経験になっております。看板更新のように学校林の保全に直接的に掛かる費用の他に、生徒児童の環境意識の涵養という観点からの補助費としても、継続的に寄付金を活用させていただきたいと考えております。

引き続き、ご理解・ご支援のほど、宜しくお願い申し上げます。